（第3種郵便物認可）　中日新聞　2010年（平成22年）3月3日（水曜日）　☆　20

今、私たちにできる事は？

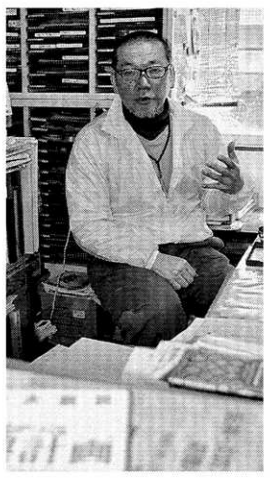
備える　その87「海外支援」

相次ぐ海外の大地震に市民レベルでできることは何だろうか。ハイチ地震をめぐるNPO法人の活動を通じて探った。（石屋法道）

死者20万人を超えるといわれる1月半ばの中米ハイチ地震。さらに2月27日に起きた南米チリのマグニチュード（M）8.8の地震。

ハイチの惨状発信「精神的な支えが大事」

村井雅清・CODE事務局長



大震災を経験した神戸市兵庫区で、二〇〇二年に設立された海外災害援助市民センター（CODE）。事務局長の村井雅清さん（五九）は「阪神大震災では世界の七十カ国から支援を受けた。困ったときはお互いさま」と活動の原点を語る。これまでイラン地震やスマトラ沖大津波などで援助。ハイチは四十六回目の海外活動になる。

ハイチ地震では、メキシコ在住のCODEメンバーのクワテモックさんが現地入りした。西部のレオガン市にとどまって支援活動をしながらリポートを作成し、CODEのメーリングリスト（ML）を通じて日本にハイチの状況を伝えている。

「大事なのは世界の裏側にも心配する人がいると伝えること。被災者のメンタル面のサポートです」と村井さん。在日ハイチ人や、大震災を経験した神戸市民らの気持ちをクワテモックさんに託した。メッセージは現地のラジオ局を通して放送されたという。

CODEの活動の中心は緊急支援ではなく「復興をにらんだ調査」。村井さんは「震災後十～二十年のプロセスをどうするかで、再建後の社会が変わる。復興とは新しい社会をつくり出すことです」と話す。

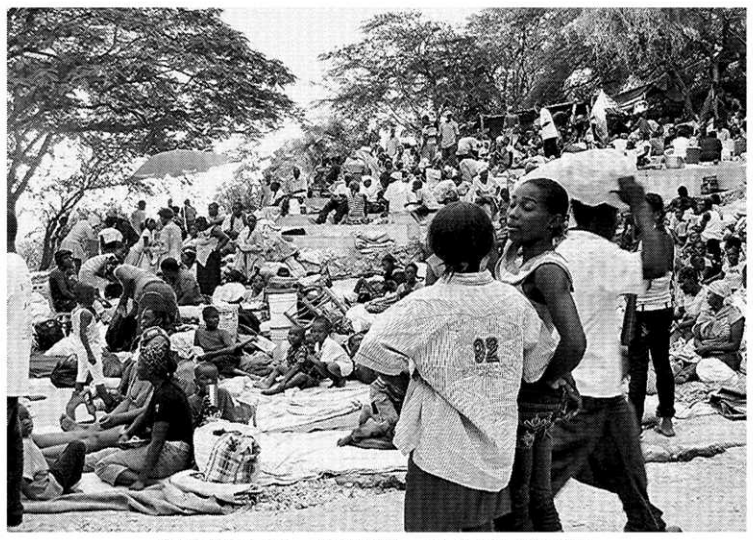
「復興は自助が基本。自分たちでできることをしなければ、助けられるのが当たり前になってしまう」と強調する。被災者が中心となったコミュニティーセンターを重視し、「住まいや教育、経済基盤を考えた復興プログラムを議論する。そこに海外ボランティアが参加すれば経験を共有できる」と語る。

日本で募った寄付は被災地の復興に必要な部分に使う。「そのためにも被災者のつぶやき、生の声が重要。いかに小さな金で、大きなことをするか。被災地の復興は実は、ハイチの人々の「自分たちの社会をつくろう」という気概が感じ取れる。クワテモックさんら海外ボランティアの元に地元のリーダーや若者が集まり、助言を求めているという。

地震後の報道では暴動や略奪が強調されたが、村井さんは「ハイチ全域で暴動があるわけではない。銀行も再開し、多くのハイチ人は避難所でしっかりと耐えている。神戸でも大きな暴動はなかった。災害イコール混乱ではない」と語る。

「むしろ、世界で最も貧しいとも言われるハイチが立ち直る過程やエネルギーを学びたい。被災地を援助漬けにしてはいけない」と村井さんは言う。「復興支援に日本から遠い近いはあまり関係がない。神戸には十五年の蓄積がある。被災地だからこその経験や知恵を伝えていく」

CODEのハイチ地震救援募金先は、郵便振替00930－0－330579、加入者名CODE。通信欄に「ハイチ」と明記。募金全体の15％を上限に事務局運営・管理費に充てる。



地震発生2日目、首都ポルトープランスにできた青空避難所の様子＝1月14日（熊谷雄一さん撮影）

現地で活動するNPOなど支援

NVNAD

日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD、兵庫県西宮市）は、国内を中心に、海外の大災害でも募金などで支援をしてきた。ハイチ地震では特別な活動はしていないが、常務理事の寺本弘伸さん（四七）は「現地で活動する顔の見えるNPOや団体を見つけて支援したい」と方針を話す。

寺本さんは海外支援について「やみくもに活動はできない。過去には支援金がどこにいったか見えない部分もあった」と語る。「現地で直接活動している団体に接触したい。そうすることで支援が一時的にならず継続できる。それは国内でも同じだ」と話す。

横の連携が大事

名古屋のNPOストックヤード

名古屋市東区に拠点を置くNPO法人レスキューストックヤードは、ハイチ地震で、二月十一日に名古屋NGOセンターが主催するチャリティーコンサートに協力し寄付を募った。ストックヤードは海外支援は実施していないが、中国の四川大地震ではCODEなどを頼りにスタッフが現地に入った。海外の大規模災害について、代表理事の栗田暢之さん（四七）は「遠い所にも気持ちを届け、被災者に日本が心を寄せていると伝えることが大事だ」と語り、これはCODEの村井さんと同意見だ。

ただ現地の事情が分からないことも多く、「ボランティア団体など横の連携が重要になる」。ハイチ地震の実質支援はCODEなどに託すという。

苦しむ命 忘れないで

名古屋「ハイチの会」報告会

二十年以上にわたりハイチ支援を続けてきたのが名古屋市の市民団体「ハイチの会」（中野瑛子代表）だ。

地震当日に滞在し、建物が崩壊する惨劇を目の当たりにしたスタッフの熊谷雄一さん（三二）＝愛知県春日井市＝や、在日ハイチ人らが二月十三日、名古屋市の名古屋国際センターで「ハイチを忘れないで！」と題した報告会＝写真＝を開いた。

ハイチの会はハイチの子どもたちへの識字教育や日本から指導者を派遣して農業支援を行っている。熊谷さんは植林、農業の指導をするため現地入りしていた。地震が起きた時、首都ポルトープランス近くのレオガン市内を車で移動中だった。「地震だ！」。同乗のハイチ人が叫んだ。大量の土ぼこりで前方が覆われた。

指導拠点だった修道院に急いだが、一階部分が完全につぶれていた。滞在先のホテルまで一時間ほど歩いたが、ホテルも倒壊していた。ポルトープランスに入ると、街のあちこちに遺体が転がり、病院前ですら瀕死の人たちが横たわっていた。だがどうすることもできない。「爆弾を落とされたようだった」「こんなに簡単に人の命が奪われていいわけがない」。そう思いながら歩いた。

「悲しさは想像を絶する。手足を切断された子どもも適切な治療を受けることができていない。外からの支援を待つしかない。ハイチの現状を頭の片隅においてほしい。それが継続的な支援につながる」。熊谷さんはこう強く訴えた。

大阪に住む、在日ハイチ人の会社員ピエール・ディオジェンさん（三四）も苦しい胸の内を明かした。

地震から三日後、やっと現地と連絡がついたが、ピエールさんを待っていたのは「弟や姉、友人がなくなった」という悲報だった。「故郷をたて直すために何ができるのか。傷ついた子どもたちの事も心配。希望を忘れず、再びよいハイチになるように頑張っていきたい」と話した。

会は被災者への支援金を募っており、これまでに約二百万円を集め、一月末にうち百万円を現地に送金した。ハイチの会への寄付金は郵便振替口座＝00800－8－124996、問い合わせは電090（3259）0890へ。（渡辺奉之）

わが家を強く

可知悟・防災士（多治見市）

念には念、合板で補強

木造二階建てのわが家に住んで二十年。岐阜県多治見市市之倉町の会社員で防災士の可知悟さん（五四）は三年前、「念には念を入れて」自らの手で自宅を補強した。

一九八〇年代、多治見市は名古屋のベッドタウンとして多くの新興住宅地が造られた。「市之倉ハイランド」もその一つで、可知さんは建て売りの家を購入した。高校土木科を出てゼネコン、住宅関係の仕事を経験したため「家の耐震性に関する知識はあった」という。

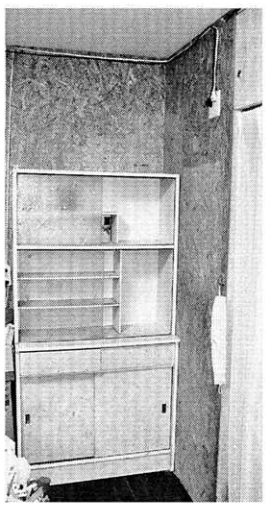
「一階と二階のバランスはいいか」「地盤はしっかりしているか」など慎重に吟味。耐震性に問題のない家を慎重に選んだ。それでも改修しようと決めたのは、防災士の資格を取得し「意識が高まった」ためだ。

ツーバイフォー（壁組み工法）に使われる厚さ十二ミリの合板を、壁が少なく比較的弱いとされたリビング（十二畳）南東側の角に張り付けた。板は天井にぴったりと付くようにとり付け、天井を支えている。ビスで留めただけだが、二級建築施工管理技士の資格を持つ可知さんは「見栄えは悪いですが、筋交いを入れるのと同じくらいの効果がある」と分析する。

筋交いを入れるためには一度、壁を取り外す必要があり、費用がかさむ。妻佐智子さん（五〇）と話し合い、「お金をかけない補強法」を選んだ。「今後はリビング全体に合板を張り、バランスを取りたい」と話す。

また、家具の大半をL字形金具で固定。金具を付けられない冷蔵庫は、上部の取っ手部分に木材をかみ合わせ壁に留めた。照明器具もつり下げ式から天井固定式に交換した。

内部の見た目はかなり変わったが、「それでも命には替えられない」。かかった費用は六万円程度で、「できることから始めることです」と、講師を務める防災講座で力説している。（志村彰太）



合板で耐震補強したリビングの壁＝岐阜県多治見市市之倉町で

© 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。